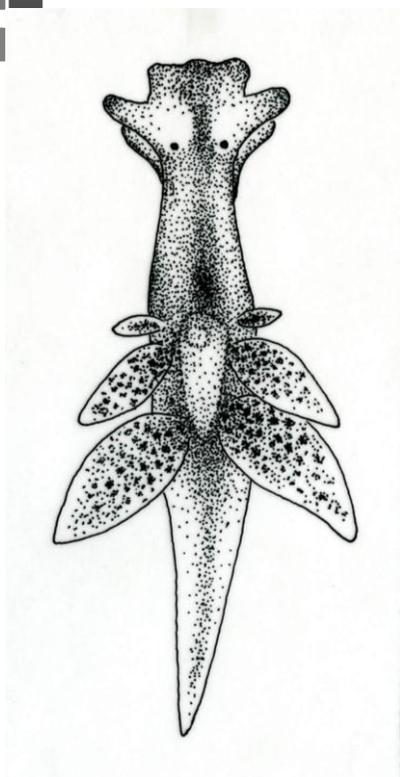


自然遊学館 だより

2009 WINTER

No. 50

■2009.1.30 発行 貝塚市立自然遊学館



第 50 号を記念して	1
記念寄稿	
丑年に思う (濱谷 巖)	1
■行事レポート	
箱谷川の生きもの	3
化石採集会	5
たわわの池さらえ	5
■生きものよみもの	
貝塚市のアミメカゲロウ目	6
クマバチの引越し (市民の森公園)	8
【泉州生きもの歳時記】	
二色の浜のウミウシ	12

■館長コーナー

冬4. 探検熱当分続きそうです	
飯盛鉦山編	16

■展示紹介

自然遊学館周辺の植物	
2008年10月~12月に展示した植物	18

■寄贈標本の紹介	18
----------------	----

■遊学館スタッフ日誌	19
------------------	----

表紙の図はコツブモウミウシ (体長1mm)

画: 濱谷 巖 本文1ページ参照

第 50 号を記念して

「自然遊学館だより」が第 50 号となりました。これは自動的にそうなったのではなく、遊学館にかかわってくださる皆様方のご支援、ご協力のお陰で生み出されたのであります。まずもってお礼申し上げます。

本館は調査・研究、常設展示、年間テーマを設定した特別展示、観察会などの行事、学校などへ出向いての出前講座、生き物の同定や飼育の相談など可能な限り精力的に事業展開をし、環境教育の拠点としてその役割を果たしているところであります。

それらの原点になりますのは標本・資料であります。本館は小規模であることから本市の生き物にこだわり、展示・収蔵しております。館内には 1,800 点の生体を含めた標本を展示しております。なかでもマダコ、ニホンヒキガエル、アカネズミなどは人気がありますし、アメリカザリガニなどは触ってもいいようにしているので子どもたちから親しまれています。また、大型の展示物でありますイノシシなども市民の方々から提供していただいたものであります。さらに、鳥や昆虫の珍しい写真などもタイムリーにいただいて掲示しています。このように本館は市民の方々と市民の目線で共に歩み、学習を重ねております。今後とも更なるご支援を得て、「自然遊学館だより」がますます充実し、ひいては本館が市民の皆様方の自然力醸成のお力になれるよう努力を重ねてまいります。

貝塚市立自然遊学館長 川村 甚吉

記念寄稿

丑年に思う

今年の年賀状には丑や牛のいろいろに工夫された絵が見られました。「丑」を辞書でひもとくと十二支（^{えと}十二支）の 2 番目で、時刻は現在の午前 2 時を中心に 1 時から 3 時の間の時間を示し、方向は北北東を指し、動物では「牛」に当たるとありました。

「うし」と言うと動物の仲間で広く「牛」「^{かいぎゅう}海牛」「ウミウシ」を連想します。「牛」は陸上に生活する哺乳綱・偶蹄類に属しイノシシやラクダと同じ仲間で、日常私たちの食材として良く知る動物です。

「^{かいぎゅう}海牛」も哺乳綱に属し海牛類に分類され海に生息します。ジュゴンの仲間で奄美諸島や沖縄の近海にも棲息します。その姿は古来“人魚”の起源とされてきました。餌は海に生育するアジモ（アマモとかリュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシの俗名があつて、後者は最も長い植物の和名とされます）を食します。

「ウミウシ」は軟体動物（ハマグリ・サザエ・イカ・タコなど）に属し、中でも巻貝で身を守る腹足綱（ホラガイ・サザエ・マイマイなど）の仲間です。これは成長の過程で内臓がらせん状に巻いて、その体は巻貝によって保護されます。やがてこれらの巻貝類の仲間の中から進化の過程で、成長の途中で巻き戻しをするものが現われました。その結果体は左右相称となり、貝殻は体から離れて捨てられます。その時先祖の巻貝時代に貝殻によって保護されていた鰓が失われ、新たに鰓が体の後方の表面に露出した状態で形成されました。そして進化

の結果種の分化が進んで多くの種が現存するようになったグループが裸鰓類「ウミウシ」の仲間です。色彩の美しいものが多く、背面の前方に1対の触角があって牛の角を思わせます。(例・ヤマトウミウシ：図1) 英語では“海のナメクジ”(sea-slug)と呼びます。

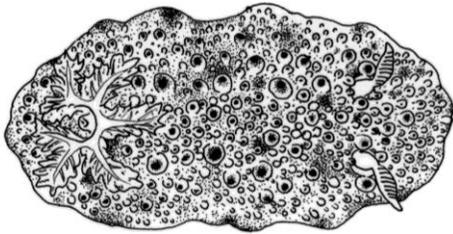


図1. ヤマトウミウシ

磯でしばしば見かけるアメフラシも広い意味で同じ仲間です。どちらも心臓の後方に鰓があることから併せて後鰓類こうさいと言います。アメフラシは刺激すると背面の裂け目から紫汁を分泌します。背面の薄い膜の下に退化的な扁平で軟らかい貝殻があって原始的な性質とされます。日本産のウミウシ類が初めて学術的に記録されたのは Adams & Reeve (1850) でした。私が知る日本の古い記事は当時の文部省編纂(明治10年初版(1877)・明治16年(1883)再販)大阪府松川半山注解・画図の博物図教授法(全)岡島寶玉堂出版です。その中に「アメフラシ」について「雨虎ハ又ウシジカ云ウ海産ノ蛞蝓類ニシテ脊ノ中ニ紫アメフラシ色ノ彩マタ質ヲ含イ有ス若シ他ノ魚来ルカイサントハカナメクジレバコレトシテ吐シフセグ襲敵ヲ防イカコトオナ烏賊ニ同ジ」と説明しています。そしてアメフラシと思われる図(図2)が描かれています。英語ではアメ

フラシを“海のウサギ”(sea-hare)と言います。

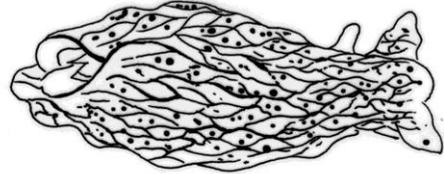


図2. アメフラシ? 博物図教授法(明治10年)より

泉州沿岸でこれまでに記録された「ウミウシ」類は100種以上にもなります。その中には新種や珍種が含まれていて、例えば“コツブモウミウシ”(体長1mm)(表紙図)は淡輪駅の真下の海辺のアジモ帯で1950年に採れた微小なウミウシの新種でしたが、国内は勿論世界中の何処からもいまだに記録がありません。今では淡輪の海でも採れなくなりました。みさき公園の海辺で多数採れた“ベルグウミウシ”(体長4mm)(図3)などと共に系統分類学上再検討が必要な種ですが、今では研究のために必要な個体が採れません。今年「ウシ年」にあやかってこの泉州沿岸で珍しいウミウシが記録されることを期待しています。

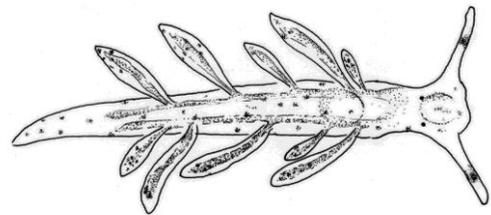


図3. ベルグウミウシ

(岸和田市 濱谷 巖)

■行事レポート

箱谷川の生きもの

場所：貝塚市蕎原・箱谷川周辺

日時：2008年10月18日(土)10:30～15:00

参加者17名

箱谷川は近木川に流れ込む小さな川です。この川の周辺には畑や田んぼが残り、里山らしい風景が広がっています。そして、たくさん生きものに会うことができる自然遊学館のスタッフお気に入りの場所です。少し汗ばむほどの陽気の中、秋恒例の箱谷ハイキングを行いました。



もみがらのベッド。ちくちくしない？

蕎原バス停に集合し、町会館でお手洗いをすませた後、刈り取りが終わった田んぼを歩きながら生きもの観察を行いました。コガネグモはまん丸い網の巣の中心で黄・黒・白の立派なしましまのおなかを見せています。水たまりをオオシオカラトンボが飛び、秋晴れの空からはキチキチキチ…というモズの高鳴きが降ってきます。ヒヨドリが十数羽の小さな群れになって移動していくのも見られました。少し湿り気の残る

水田や水路には、今年生まれのニホンアマガエルやツチガエルの子どもがはねています。カエルを食べに現れたヤマカガシを採集しビンに入れて観察しました。子どもたちはもみがらの山に飛び込んで楽しそう。

自然遊学館の山田さんがお腹の大きくふくらんだハラビロカマキリを水につけると、ハリガネムシが飛び出してきて驚きました。

田んぼの後は林道へ。植物のスタッフ湯浅さんからチャの木の説明がありました。白い小さな花をみると、ツバキの仲間であることが納得できました。林道にはいると、同じコガネグモのなかまでもジョロウグモの網が目立つようになります。まんなかに陣取った巨大なメスのまわりに、小さく居候しているのがオスですよと言うと、何故かお母さん達に受けていました。

道のへりは掘り返されて新しい土がむき出しになっています。イノシシのしわざです。そこかしこに^{けものみち}獣道もみつかりました。

参加者のみなさんがとりわけ目を奪われていたのは真っ赤な小さいキノコ。土手の苔の中にカラフルな画鋲を刺したよう。図鑑で調べると、ベニヒガサというキノコでした。



小さな朱色のベニヒガサ

林道を抜け、小さな田んぼの広がる箱谷に到着。お弁当を食べた後は、水路や川に網を入れて自由に採集。刈り取った後の水田にはイノシシの足跡がたくさん、ノウサギのふんも見つかりました。チガヤに作られた、子育て真っ最中のカヤネズミのまるい巣を、離れたところからそっと観察しました。

水路ではひとりがイモリを採集したのをきっかけに子どもたちの中でイモリブームが巻き起こり、30匹近いイモリが集まりました。これだけたくさんいると、おなかのちがいがよく分かります。田んぼに行く前は、イモリがどんな生きものでどんなところにいるか、図鑑で勉強した話をたくさんしてくれた男の子が「おれ、イモリ生まれて初めて捕った」と大喜びしていたのがうれしかったです。

山のように捕れたイモリですが、生きものの飼育はとても大変なことで、飼育している間にどんな病気が付くか分からないので、いったん採集して持ち帰ったら自然に戻さず死ぬまで飼わなくてはいけないこと、遊学館のイモリはもう5年も生きているけどまだまだ元気なことを説明したところ、みんなもとの水路に帰してくれて一安心。オタマジャクシも一匹捕れました。オタマで越冬することもあるツチガエルでしょう。魚ではヨシノボリやカワムツが、昆虫では去年も同じ場所で採集されたヒメカマキリのメスがとれていました。

観察できたもの

植物：ガガイモ、イヌタデ、カラスウリ(実)
クワクサ、イヌビエ、メヒシバ、ツユクサ、カラ



コウヤボウキの花

ムシ、コゴメガヤツリ、ヒメクグ、アキノノゲシ、ヤナギハナガサ、セイタカアワダチソウ、コセンダングサ、センダングサ、アメリカセンダングサ、ヨメナ、サクラタデ、オモダカ、ヒメミソハギ、アブラススキ、キツネノマゴ、シマスズメノヒエ、カタバミ、チカラシバ、ヤマノイモ、ノビルの花、チャ、ハナタデ、ミズヒキ、サルトリイバラ、ネズミガヤ、ミゾソバ、ヒヨドリバナ、チヂミザサ、ヤブマメ、ヒサカキ、コウヤボウキ、ゲンノショウコ、アキカラマツ、ハキダメギク、コブナグサ

陸生昆虫：イチモンジセセリ、ツマグロヒョウモン、ヒメカマキリ、モンシロチョウ、ウスバキトンボ、アカネ類、ウスイロササキリ、ヒシバツタ、コバネイナゴ、ツツレサセコオロギ、ハラビロカマキリ、オオカマキリ、コカマキリ、ヒメカマキリ、マルカメムシ、ケラ、ヤマクダマキモドキ

水生昆虫：コオニヤンマ幼虫、コシボソヤンマ幼虫、コヤマトンボ幼虫、シオカラトンボ属幼虫、オジロサナエ幼虫、カワトンボ幼虫、アメンボ、カクツツトビケラ属幼虫

魚類：カワムツ、ヨシノボリ属

甲殻類：ミナミヌマエビ、ニッポンヨコエビ、サワガニ

貝類：カワニナ、マシジミ

哺乳類：カヤネズミの巣2つ、イノシシの掘りあと、ノウサギの食べあととフン、テンのフン（ムベとカキの種が入っていた）

鳥類：ノスリ、コゲラ、モズ、エナガ、コジュケイ、ホオジロ、キセキレイ、セグロセキレイ、ス

ズメ、ヒヨドリ

両生類：ニホンアマガエル、ツチガエル、トノサマガエル、イモリ

爬虫類：ヤマカガシ、シマヘビ脱皮殻、カナヘビ、ニホントカゲ

(同定：西澤真樹子、湯浅幸子、山田浩二、向井康夫)



(西澤 真樹子)

化石採集会

場所：貝塚市蕎原箱谷

日時：2008年11月9日(日) 10:30~15:00

参加者 49名

毎年、人気行事の化石採集。今回も4倍の応募者の中から抽選でした。朝から小雨が降っていましたが、幸い、採集会の間はほとんど止んでいて差し支えありませんでした。講師に蕎原箱谷古生物研究会の高田雅彦さんと加藤守さんをお呼びし、安全に採集できる場所の整備から、採集法の説明、採集物の解説など全般にわたりお世話になりました。

採集物は昨年、一昨年と連続して珍しいサメの歯化石が見られましたが、今年は残

念ながら出てきませんでした。しかし、昨年に見られなかったアンモナイトの化石が発掘され、太古の昔(約6800万年前)のロマンに触れることができました。



蕎原箱谷で化石を探す

* 今回、産出された化石

二枚貝：ナノナビス、エリフェラ

アンモナイト：パキディスカス

甲殻類：スナモグリの殻?

裸子植物

生痕化石：サンドパイプ

(山田 浩二)

たわわの池さらえ

場所：農業庭園「たわわ」

日程：2008年11月23日 10:00~15:00

参加者 22名

5年前から続いている行事で、1年に1度の池の水を抜く日です。底に溜まった泥をバケツですくいだして、生物を調べるつもりだったのですが、水を抜く時に底樋(そこ

ひ)が詰まり、水が流れなくなってしまいました。バケツで水を池から出すのに3時間ほどかかり、子どもたちにも水を出すのを手伝ってもらいました。子どもたちも水を流すのを楽しんでやっていました。水がなくなった時、泥の中から生物が出てきて、子どもたちには生物を採取して楽しんでもらいました。



たわわの小池で生物観察とバケツで水流し

【観察された生物】

水生昆虫：フタバカゲロウ（幼虫）、オオアオイトトンボ（成虫）、コオニヤンマ（幼虫）、ギンヤンマ（幼虫）、クロスジギンヤンマ（幼虫）、ヤブヤンマ（幼虫）、コシボソヤンマ（幼虫）、シオカラトンボ（幼虫）、コシアキトンボ（幼虫）、チビミズムシ、マツモムシ、コマツモムシ、マメゲンゴロウ、ハイイロゲンゴロウ

陸生昆虫：クビキリギス、セスジツユムシ、ケラ、コカマキリ

爬虫類：カナヘビ

両生類：ウシガエル、ニホンアマガエル

魚類：カワムツ、ドジョウ、ヨシノボリ類

甲殻類：アメリカザリガニ、サワガニ、スジエビ

(鈴子 勝也)

■生きものよみもの

貝塚市のアミメカゲロウ目

アミメカゲロウ目という名前には馴染みのない方が多いと思います。川虫のカゲロウとは違います。漢字では脈翅目と書きます。翅の脈が網目状になっているのが名前の由来です。日本には15科約150種が生息しています^リ。

どういう仲間が含まれるのか、名前をあげてすぐに分かってもらえるのはクサカゲロウかウスバカゲロウでしょう。ウスバカゲロウの幼虫は、巣穴を掘ってアリやダンゴムシなどを待ち伏せする、いわゆる「アリジゴク」です。あと、ヘビトンボを本誌31号で紹介しました。幼虫は水生の捕食者で、近木川の上流域に生息しています。

2008年12月現在、当館所蔵の貝塚市産アミメカゲロウ目は10科37種になっています(表1)。まだ採集されていない科もあり、種数はまだ増える余地があります。リスト中の点線は垂目の区分を示していて、これらを独立の目として扱う分類もあります。

アミメカゲロウ目は小さなグループですが、幼虫の生態が多様なのが特徴です。センブリはヘビトンボを小型にしたような形で、ヘビトンボと同じく幼虫は水生の捕食者です。センブリの幼虫は池や川の流れが緩やかな場所に生息します。クサカゲロウやヒメカゲロウの幼虫は陸生の捕食者で、草上でアブラムシなどに口吻を突き刺して体液を吸います。カマキリの幼虫が小さなクサカゲロウの幼虫を捕食しているように

見えたのが、その逆でクサカゲロウの方がカマキリの鎌のつけ根に口吻を突き刺していたことを覚えています。

表1. 貝塚市のアミメカゲロウ目リスト
自然遊学館所蔵標本より 2008年12月現在

亜目	科	種
ヘビトンボ亜目	ヘビトンボ科	タイリククロスジヘビトンボ ヘビトンボ ヤマトクロスジヘビトンボ
-----	センブリ科	センブリ属の一種
アミメカゲロウ亜目	ツノトンボ科	オオツノトンボ ツノトンボ
	クサカゲロウ科	アカスジクサカゲロウ アミメクサカゲロウ イツホシアカマダラクサカゲロウ カオマダラクサカゲロウ クロヒゲフタモンクサカゲロウ スズキクサカゲロウ セアカクサカゲロウ ヒメクサカゲロウ属の一種 マツムラクサカゲロウ ヤマトクサカゲロウ ヨツボシクサカゲロウ
	クシヒゲカゲロウ科	クシヒゲカゲロウ
	ヒメカゲロウ科	Hemerobius 属の一種 アシマダラヒメカゲロウ チャバネヒメカゲロウ ホソバヒメカゲロウ ミドリヒメカゲロウ ヤマトヒメカゲロウ
	カマキリモドキ科	キカマキリモドキ
	ウスバカゲロウ科	ウスバカゲロウ コウスバカゲロウ コカスリウスバカゲロウ コマダラウスバカゲロウ ホシウスバカゲロウ マダラウスバカゲロウ モイワウスバカゲロウ
	ヒロバカゲロウ科	ウスモンヒロバカゲロウ カスリヒロバカゲロウ スカシヒロバカゲロウ ヤマトヒロバカゲロウ
-----	ラクダムシ亜目	
	ラクダムシ科	ラクダムシ

カマキリモドキの成虫はカマキリに似て前脚が鎌状になっていて他の昆虫を捕食します。ところが幼虫の生態はカマキリとまったく異なります。1 齢幼虫がクモに取り付き、クモが産んだ卵囊^{らんのおう}に入り込み、クモの卵を食べて発育します²⁾。クモに取り付けない1 齢幼虫も当然います。それは死を

意味します。ですから産卵数がとても多いのです。

ラクダムシの幼虫は陸生の捕食者です。^{そぶら} 蕎原で得たメス成虫が唯一の採集例ですが、おそらくはアカマツの倒木に産卵に来たものと思われます。変てこりんな名前ですね。小学館の「大辞泉」という辞書には「腹部の節が丸くくびれ、ラクダの背に似る」と書かれていますが、自分には中胸と後胸の背にコブがあるように見えます（英語では snake fly と言います）。

下の図1は、蕎原^{とてがわ}の東手川（標高約 415 m）で灯火採集を行った時に白幕に飛来したクシヒゲカゲロウです。この種も採集例は1 個体のみです。幼虫の生態は分かりません。幼虫は陸生だと推測され、成虫は飛ぶときに、「クルクルと舞い狂う」ように見えるそうです³⁾。ウラギンシジミのような飛び方をするのでしょうか。



図1. クシヒゲカゲロウ標本（開帳 23mm）
2007年7月18日、蕎原の東手川にて採集

取りとめもなく書いてきましたが、それぞれのグループに関する記述は代表的なもので、例外も多数あります。ウスバカゲロウの幼虫には巣穴を掘らないものもいますし⁴⁾、クサカゲロウの幼虫には塵^{ちり}で体を覆

ってカモフラージュするものもいます¹⁾。同じような種数のトンボやバッタなどのグループを思い浮かべた時、アミメカゲロウ目幼虫の生態の多様さには、本当に目を見張るものがあります。

引用文献

- 1) 塚口茂彦 (1997) 脈翅類. In 「日本動物大百科 9 昆虫Ⅱ」: 10-11.
- 2) 平田慎一郎 (1997) カマキリモドキ類. In 「日本動物大百科 9 昆虫Ⅱ」: 13.
- 3) 鹿野忠雄 (1928) クシヒゲカゲロウ (Dilaridae) に就いて. 昆蟲 3 (1): 50-51.
- 4) 松良俊明 (1997) ウスバカゲロウ類. In 「日本動物大百科 9 昆虫Ⅱ」: 14.

同定に用いた主な文献

- 市田忠夫 (1992) 青森県の脈翅類. *Celastrina* 27: 78-124.
- 田畑郁夫 (2003) 日本産クサカゲロウ成虫絵解き 検索. *マイナースターズ* 11 特別号: 2-16.

(岩崎 拓)

クマバチの引越し (市民の森公園)

10月19日午後、市民の森公園へ遊びにこられていた方から「遊具付近でハチが飛び交い危険だ」と通報がありました。すぐ現場に出向き、木製遊具の隙間から出たり入ったりしているアシナガバチを捕虫網で採集し、当館の昆虫担当岩崎拓が「フタモンアシナガバチ」と同定しました。暖かい日で、多くの子どもたちが遊具を利用して

いましたから、付近にいるハチをできる限り採集しました。

大きな網を振り回していたのが目立っらしく、隣の^{あずまや}四阿で子どもを遊ばせていたお母さんたちから「こちらにもハチがいます」と呼び止められました。杉板を焼いた^{あずまや}四阿の^{はり}梁 (長さ: 2m90cm 幅: 118mm、厚さ: 25mm) の、地面に面した部分に直径 1cm 強の丸いきれいな穴が 10 個もあいていました。



市民の森の四阿

それがハチの巣だとは思えませんが、入りするハチは「クマバチ」でした。岩崎拓から、「クマバチは木に穴をあけて巣をつくり、穴は奥の方でいくつかの部屋にわかれていて、それらの穴がつながり、最終的には^{あずまや}四阿の屋根がみんな巣になるかも…」と聞き、貝塚市役所の公園担当者に連絡を入れました。

藤棚の下でホバリングしているクマバチをよく見かけますが、クマバチについてそのこと以外何も知識がなかったので、岡本素治岸和田自然資料館長にお聞きしました。「クマバチはハナバチの仲間で、手で握るようなことをしない限り刺ささない、巣か

ら飛び立つときには、一度下空して後上昇するので、居合わせた人を驚かせることもある、クマバチの巣は人気甲虫真っ赤なヒラズゲンセイのすみかになる」などを教えていただきました。その上で「そのままそっとしておき、説明看板を立て、公園を訪れる人たちにクマバチの生態を知ってもらうようにできないものだろうか」と提案されました。

翌10月20日、貝塚市役所の公園担当者が現場を見にこられたとき、この場所で生態展示をしたいと希望を述べてみましたが、担当課としてはハチと名がつく以上放っておけないこと、それぞれの巣が大きくなって杉板をボロボロにされる前に、冬を待ってニスを塗って封じてしまうと、気の毒がりながらもきっぱりと宣言され、「今の杉板を外して、新しい木と替えてくれるならいいですよ」付け加えられました。

こんな小さな自然保護さえ通せない自分を情けなく思いながら、岡本先生に報告すると「取替え可能な杉板なら、ぜひいただきたいと思います。交渉してみてください。岸和田自然資料館や自然遊学館に移してもよいのではないですか。移設の方法などについては指導に伺います」とのご返事、一瞬にして気持ちは前向きになりました。こんなとき頼りになるのは自然遊学館わくわくクラブ、さっそく会員の北川敏喜さんに現場を見に来ていただくようお願いしました。すると、数日後には「見てきたよ。杉板さえ手に入れば、あんなの簡単」と。

10月23日、岡本岸和田自然資料館長がクマバチの巣を見に来られた日は、とても暖かい日でした。



杉板に近づいて観察

巣のある1枚の杉板以外は、すでにニスが塗られていました。クマバチの習性などいろいろ教えていただきながら観察しました。杉板中央部の穴2個は、なんだか他と様子が違います。板の垂直部分にも穴を浅く掘り進めた跡があるのです。これクマバチではなく、ハキリバチの仲間が乗っ取った巣だと教えていただきました。



カメラの先にハキリバチの巣（白っぽい）

巣の移動はクマバチが冬眠している12月に、移動先はこの場所になるだけ近い方が、冬眠から目覚めた時の混乱が少なく、それ以後も棲み付いてくれるだろうということで、自然遊学館の建物周辺で探すこと

にしました。

引越し計画ができたのに、3mの長さの杉板が手に入らず気をもみましたが、北川さんが知り合いの大工さんを訪ねて購入してくださり、巣の移動は12月27日(土)と決まりました。

12月6日、岡本先生からメールです。

「一昨日のこと、驚いたことに(自宅の)ベランダをクマバチが飛んでいました。暖かいとこんな季節にも動くことがあるみたいです。念のため27日の作業中はセロテープでフタをしておいた方がよいみたいです」



杉板をどのようにして外せるか

12月27日、岡本先生立会いのもと、自然遊学館わくわくクラブの北川敏喜さんと白木茂さんが、杉板を外す作業に取り掛かりました。長くてしっかりした釘が予想以上に数多く打ち付けられていて、思いのほか時間がかかりました。衝撃が大きすぎたのかクマバチ5匹が巣から出て、ブンブン音を立て始めました。



こんなにしっかり打ち付けなくても…



容器の中の5匹のクマバチ

その5匹にもう一度眠ってもらうために、容器に入れて冷蔵庫に保管し、その他の巣穴入り口は、ガムテープで塞ぎました。



外した杉板。白く写っているのがガムテープ

はめ込む新しい杉板をバーナーで焼くのがまた一苦勞、その間に岡本先生が引越先を物色、自然遊学館の建物裏手にある水もの倉庫の横棧が、位置も長さもピッタシだとわかり、横棧に被せるように取り付けられました。冷蔵庫から5匹のクマバチを出し、下方の巣穴から押し込みましたが、



クマバチを戻す岡本先生

1匹だけが巣穴の中へ入らず、お尻や翅を出したままなので、紙を当てテープでとめ、しばらく様子を見ることにしました。



水もの倉庫に張りつけた杉板

翌28日もそのままでしたから、岡本先生に報告すると「落ちることはないと思うのですが、心配でしょうから蓋をしておいて

ください。年が明けて1月8日にうかがって何とかします。ヘアードライヤーを準備しておいてください」。



お尻を見せるクマバチ

1月5日、出勤してすぐに覗いてみると、お尻も翅も見えません。

「一安心ですね。これで春まで大丈夫だと思います。クマバチの巣を身近に見ていると、春の巣別れがかなりつらいものです。生まれた巣を引き継げるのは1♀だけなので、他は出て行かなくてはならないのですが、未練がましい個体がいるのです」岡本先生のメールを読み、私は今クマバチの母親のような気持ちになって、春が来るのを待っています。

(白木 江都子)

【泉州生きもの歳時記】 二色の浜のウミウシ

ダイバーの間では、海の宝石とも言われ、色鮮やかな種類のものも多いウミウシですが、貝塚の海岸でもこれまでいくつか見つかっています。当館の海辺の観察会でも確認されることがありますが、見つかるや、その姿に参加者の注目を一斉に集める人気者です。二色の浜では新野大さん（当時、海遊館勤務）が、1990年から2004年にかけて観察した海洋生物リストにウミウシ類18種が記録されています（表1）。ここでは当館の調査活動を通じて、二色の浜で確認されたウミウシ類（後鰓類）17種について紹介します。

なお、同定について多くの助言を下された濱谷 巖先生、調査に協力いただいた寺田拓真氏に謝意を表します。

とうじゆんもく 頭楯目キセワタ科 キセワタガイ

体は円筒状で、クリーム色。小型の貝を丸呑みして摂食する。砂泥底に生息し、砂に潜る習性をもつ。二色大橋から釣りをしていたり採集されたこともある。



体長約 20mm、2006年4月3日採集

頭楯目ブドウガイ科 ブドウガイ

卵形で薄い貝殻が体後半部を覆う。軟体部は緑色をおび、ブドウの果実をイメージさせる。アオサ類などの海藻上でみられることが多い。触角を持たない。



体長約 15mm、2004年4月1日採集

のうぜつもく 囊舌目ゴクラクミドリガイ科 クロミドリガイ

体色は深緑色の地に小白点が散在。マントのような側足の端は白く、触角は黒っぽい。突堤沿いに生える海藻上で採集されることが多い。通常、緑藻につくとされている。藻食性。



体長約 20mm、2004年4月21日採集

囊舌目ゴクラクミドリガイ科
イズミミドリガイ

最大でも体長 10 mm 程度の小型種。外見上、ハマタニミドリガイとの区別が難しい。岬町長松海岸で採集され、新種記載されたことにより、和名に和泉^{いずみ}の地名がつく。囊舌目の仲間は、とがった歯舌^{しぜつ}で海藻の細胞壁に穴をあけ、中身を吸い取って食べる藻食性。



全長約 8mm、2007 年 4 月 6 日採集

アメフラシ目アメフラシ科
アメフラシ

体色は紫黒色で、暗白色の不規則な斑紋を多数もつ。大きいものは体長 300 mm を超える。薄い葉片状の貝殻が背中に埋まっている。刺激を与えると紫色の汁を出し、雨雲様な煙幕が海水中に広がり、身を隠す。写真は突堤横の岩に 2 個体が交際し、産卵しているところを水中で撮影したもの。



全長約 200mm、2005 年 5 月 26 日撮影

囊舌目ハダカモウミウシ科
ミドリアマモウミウシ

背側は突起に覆われる。茶緑色の網目模様をもつ。最大でも体長 15 mm 程度の小型種。突堤沿いに生える海藻上にいることが多い。藻食性。



体長約 10mm、2006 年 4 月 3 日採集

アメフラシ目アメフラシ科
トゲアメフラシ

背面は樹枝状の突起に覆われており、鮮やかなブルーの斑紋をもつ。貝殻は持たず、刺激を与えると紫色の汁を出す。藻類をかじり取って食べる。秋期に多く見られる。



体長約 80mm、2002 年 9 月 4 日採集

はいじゆんもく
背楯目ウミフクロウ科
ウミフクロウ

黄灰色の地に網目状の模様がある。ゴカイやヨコエビ、貝類や他のウミウシなど様々な動物や、その死骸を食べるようである。護岸や離岸堤で見られることが多い。



体長約 70mm、2006 年 4 月 19 日採集

裸鰓目フジタウミウシ科
エダウミウシ

和名が示す通り、樹状突起を背面に持つ。また、紅色の細点が体をおおい、派手な外見。加えて、樹状突起の先端には発光細胞があり、刺激に対して発光する。



体長約 50mm、2006 年 4 月 30 日採集

らきいもく
裸鰓目フジタウミウシ科
クロコソデウミウシ

頭部の前縁と鰓の側方に指状の突起がある。この突起や触角には黄色が混じり、黒褐色の体色に映える。フサコケムシ類を食べるといわれる。裸鰓目の仲間は、後鰓類中、最大の種数を誇る。共通して殻をもたず、肉食。



体長約 18mm、2007 年 8 月 16 日採集

裸鰓目ドーリス科
ヤマトウミウシ

茶褐色の体に大小のこぶ状の突起が覆う。肉体には骨片を含む。地味な色あいなので、海中では大きさのわりに見つけにくい。背中の方には花が咲いたような羽状の鰓がある。ダイダイイソカイメンを食べるといわれる。



体長約 80mm、2007 年 5 月 5 日採集

裸鰓目イロウミウシ科

シラライロウミウシ

黄白色の体色の地に赤紫色の水玉模様があり、体の周縁は橙黄色をしたオシャレさん。突堤に沿って沈められている岩場で採集された。



体長約 25mm、2004 年 7 月 23 日採集

裸鰓目クロシタナシウミウシ科

マダラウミウシ

体の色、模様は異なるが、上記のクロシタナシウミウシと同種の可能性がいわれている。和名の通り、黒色の斑紋がまだら模様(マダラ)に散在する。



せんなん里海公園、体長約 70mm、
2003 年 6 月 29 日撮影

裸鰓目クロシタナシウミウシ科

クロシタナシウミウシ

このグループのウミウシは口器にある歯舌しぜつと呼ばれるやすり状の歯を欠くことから、舌無しの和名がある。体は黒いが、周りはいすオレンジ色に縁どられる。カイメン類を食べるといわれる。



岬町長崎海岸、体長約 50mm、
2003 年 8 月 30 日撮影

裸鰓目トモエミノウミウシ科

アカエラミノウミウシ

背側にミノ状の多数の細長い突起を持つ。体色は全体的に赤色をしたものが多い。突起の先端は白色。頭部には触角より長い、口ひげのような一対の口触手こうしょくしゅがある。刺胞動物を食べるといわれる。



体長約 35mm、2003 年 3 月 27 日採集

のですが・・・」といえば多分許可してもらえらると思うのですが生来の内気がどうもそうさせないようです。ということは、泥棒のように不法侵入かといえますと、そんなことはしていないのです。

短い歴史(’08年7月からのスタート)ですが、近畿にあります鉢山跡を10ヶ所あまり訪ねました。今まで訪ねた鉢山跡は山中のひっそりとしたところにありますからなかなか発見できません。それでも人に聞いたりにはしませんでした。三重県の山田鉢山などは2回失敗しました。文献やネットで調べて推理を働かせて探検します。発見したときは大変嬉しいです。

飯盛鉢山はネットにたくさんの情報が載せられています。よく読みますと簡単に行くことができるのですが、私はその場所の発見に半日も費やしました。同じ道をいたり来たり、それはもう自分に情けなくなるほどでした。しかし、ネットの情報を頼りにしなかったお陰でご褒美がつかしました。

ミカン畑とミカン畑の間にある軽トラックが何とか通ることの出来る道があります。林道というのでしょうか、農道といえいいのでしょうかわかりませんが、その道の両肩にご褒美があったのです。石ころがピカリと光るのです。車から降りてみました。なんとその石は一辺が2mmほどの正方形で金色に光るものがたくさんついているのです。そんな石がゴロゴロです。一日いても自動車はおろか人さえなかなか通ることのないと思われるその道に農作業を終えたトラックが来たのです。「これ拾ってもいいですか」という私の質問に笑いながら頭を縦に振りながら通り過ぎられました。3個拾

って坂を下りていきました。

と、そのとき突然選鉢所が現れたのです。その後何度も見ることになるのですが素晴らしい芸術的な石積みです。その上にコンクリートで造られた、まるで要塞のような選鉢所です。ネット情報ではこの選鉢所跡やそれに続く坑道にはズリはないと載っています。ところが、私が先ほど拾った道路わきには鉢物と思しき物がゴロゴロしているのです。これを褒美というより他に言葉はありません。

褒美はまだまだ続きます。持ち帰った資料を本館の博識で幅広い人脈のある職員がその道の先生にその話をしてくれました。なんとこれだけの含有量のある資料が両手で抱えるほどの大きさであれば博物館資料として立派に通用するとのことでした。多分探せば両手どころか人間の力では持てないほどのものがあるかも知れません。

ここまで述べて、私は重要な問題に直面しました。直面しながら当惑しました。この号は「冬」です。これまでの話は夏の飯盛鉢山発見時の話でした。夏と冬を入れ替えてはいけません。ほんの少しだけの付け足しになるのですが、4回目の今回(年の瀬ですから無論冬)、また新たな発見をすることです。といいながらそのことを述べる訳にはいきません。なぜなら、それはひょっとすれば大発見であるかも知れないからです。(ハハハ。)

(川村 甚吉)

■展示紹介

自然遊学館周辺の植物

2008年10月～12月に展示した植物

秋といえば、クリやドングリの季節です。自然遊学館のある市民の森周辺には、ドングリになる木が沢山植えられています。アラカシ、シラカシ、ウバメガシ、コナラ、クヌギ、ツブラジイ、スダジイ、マテバシイなどです。自然遊学館の前の街路樹はマテバシイです。マテバシイのドングリは大きくて、炒って食べられます。(スダジイ、ツブラジイのほうがおいしいですが) 大きいのでドングリ遊びも楽しい。

きく科：ナルトサワギク、チチコグサ、チコグサモドキ、セイタカアワダチソウ、ヨモギ、コセンダングサ、ヒロハホウキギク

あかね科：ヘクソカズラ

なす科：イヌホオズキ

くまつづら科：ヒメクマツヅラ

あかばな科：コマツヨイグサ

とうだいぐさ科：コニシキソウ、アレチニシキソウ

つゆくさ科：ツユクサ、ノハカタカラクサ

かやつりぐさ科：カヤツリグサ、イヌクグ、クグガヤツリ、ハマスゲ

いね科：オヒシバ、メヒシバ、アメリカスズメノヒエ、メリケンカルカヤ、キンエノコロ、シマスズメノヒエ、ススキ

(湯浅 幸子)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2008年12月分まで)

<哺乳類>

◆飯田政治さんより

アブラコウモリ 死体1点

泉南市りんくう南浜

2008年10月30日採集

◆湯川浩之介・大西悠介・浦川拓巳さんより

ネコ 顎骨1点

貝塚市二色 2008年12月17日

ネコ 頸椎1点

貝塚市二色 2008年12月19日

<鳥類>

◆白木茂さんより

メジロ(?)の巣 1点

岸和田市葛城町 2008年10月18日採集

◆藤村雅志さんより

メジロ 死体1点

岸和田市岡山町 2008年2月1日採集

◆飯田政治さんより

ノゴマ 死体1点

スズメ 死体3点

モズ 死体1点

泉南市りんくう南浜

2008年10月30日採集

<爬虫類>

◆西田和夫さんより

スッポン 卵1点

岸和田市(蜻蛉池公園)

2008年10月19日採集

- ◆大阪府水産技術センターより
アカウミガメ ♀死体1点
深日（定置網） 2008年6月9日採集
（剥製にして展示します）

<魚類>

- ◆澤田福二さんより
イシダイ 生体1点
津田川河口 2008年10月8日採集
- ◆鈴子晴久さんより
トラウトゴ 生体1点
和歌山県串本町 2008年10月18日採集
- ◆森田美津子さんより
コンゴウフグ 死体1点
貝塚市二色浜 2008年12月10日採集

<昆虫>

- ◆福西勝之さんより
オサムシモドキ 成虫1点
オオハサミムシ 成虫1点
羽曳野市広瀬 2008年10月11日採集

10月29日、中谷憲一さんからドイツ式標本箱の大箱10個を寄贈していただきました。ありがとうございました。（館）

11月20日、貝塚市立南小学校へ4年生の総合学習、「川の生きものを調べる」がテーマの授業に行ってきました。地元を流れる近木川にすむ様々な生物の紹介や、採集方法についてアドバイスをしてきましたが、これを機に関心を持って喜んで川に入ってくれる生徒が少しでも増えてくれたらと思います。（浩）

11月29日、前号で9月10日に和泉葛城山で網に入れながら逃がしてしまったトンボがタイリクアカアカネであるかもしれないと報告しましたが、松田勲さんに写真で同定していただき、タイリクアカアカネであることが分かりました。貝塚市のトンボは73種のままとりました。（岩）

■遊学館スタッフ日誌

10月23日、クロマダラソテツシジミの分布拡大を調査している大阪府立大学農学部の平井規央先生と大学院生の向井康夫さんが、貝塚市畠中のソテツで、成虫・蛹・幼虫・卵を見つけてくれました。幼虫は飼育して、11月6日から9日の間に20匹が成虫になりました。本誌39号で貝塚市のチョウ類が76種と報告して以来、久しぶりに種数が増えました（77種目です）。（岩）

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2009 冬号 (No. 50)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2009.1.30

この小冊子は市内印刷で作成しています。